市民の目線で市民が発信する
地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com/

SHIMIN PRESS

市民プレス：第27号

発行人　特定非営利活動法人
「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作・印刷　デジタル工房
ＦＡＸ　048（476）9111
〒353-0004
埼玉県志木市本町5-18-24

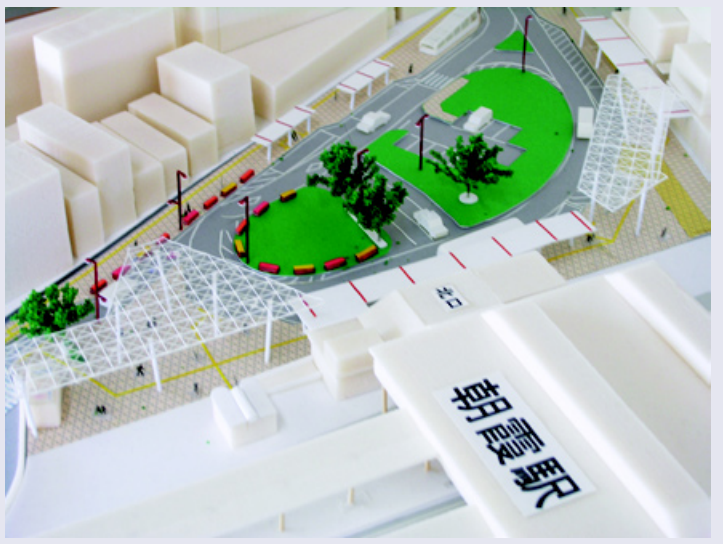
市民の声を反映して進められる・・・朝霞駅北口駅前広場の整備

朝霞市は、独立行政法人都市再生機構（旧都市公団）との協働により、北口駅前広場の整備に取り掛かっているが、3月26・27日、説明会を開き、大屋根、照明、景観、舗装などの具体的な事項について、市民の提案を求めた。

設計、着工のプロセスで、オープンに議論し、検討することは、これを利用する市民にとっては一歩前進と言える。

整備計画案は、誰でも使い易いユニバーサルデザインを基調としており、利便性、安全性をもつと同時に、愛着がもてる駅前空間の創出がテーマである。

市役所の担当課に模型を展示し、絵図を加えた検討資料を各公民館・支所・出張所に配置し、意見箱を置いて、広く市民の意見、提案を求めた（4月3日～28日まで）。これらを参考にして具体的な事項の決定がなされる。



都市計画課に置かれた模型

観光都市にいざづくり

新座市は一昨年、「観光都市にいざ・雑木林とせせらぎのあるまちづくり」計画の認定を受け、国からの支援を得て、今年2月にはアクションプランをまとめた。

この計画を進めるため新座市は、3月25日、市役所で「観光都市づくり講演会」を開催した。

須田健治市長は、住んでよし、訪ねてよしのまちを目指し、市内全域を「フィールドミュージアム」としてゆく、と挨拶した。

引き続き、国土交通省観光地域振興課長の若林陽介氏が、「観光と地域振興」をテーマに講演した。若林氏はまず、外国から日本への旅行者数は、日本人の海外旅行者数と比べると少ない（但し台湾を除く）現状を述べ、訪日外国人旅行者を増やす「ビジット・ジャパンキャンペーン」について解説し、わが国各地の観光地づくりの事例を紹介された。

ポイントとして、地域自治体と民間との協働、リーダーシップをもった人材が必要で、また関係者の幅広い連携が必要なことを強調した。

なお新座市の雑木林や野火止用水は素晴らしいので、全面的にバックアップしたい、との考えを示した。今後、国からの力強い支援が期待される。

観光都市づくり講演会の会場から

埼玉県の文化財に指定された志木市田子山富士塚

県の教育委員会は3月17日、志木市敷島神社の「田子山富士塚」ほか4件を県の文化財に指定した。

「田子山富士」として、かつては近郷の小学生の遠足で親しまれた景勝で、当時は頂上まで登ることができたので、お弁当をひろげた記憶をもつ人も多い（危険なので、いまは登山禁止）。また先年、志木市の文化財として指定されたあと、このたび「田子山富士塚」の名で県の指定となったので、いわば格上げであり、スピード出世にもなった。

富士塚は各地の「冨士講」によって構築されているが、田子山の富士は、富士塚として埼玉県の指定1号となり、その規模、大きさ（高さ8・5メートル、円周125メートル）は比類が無く、富士山を模した形、圧倒的な数の石碑を誇る。溶岩は静岡、山梨県の富士山から運ばれたもの、運搬には新河岸川の舟運が使われたのでは、と推定する方もいるが、真相は明らかではない。

志木市が作成した調査報告書

桜が咲くころの田子山富士塚（志木市本町二丁目）

理化学研究所一般公開

4月17日（月）から23日（日）まで、〈小さな発見未来につながる第一歩〉の標語で知られる、「科学技術週間」に合わせて、和光市の理化学研究所が、22日（土）例年のように公開され、多くの高校生を含む入場者で賑わった。

独立行政法人理化学研究所は、大正6年（1917）、自然科学の唯一の総合研究機関として設立された。物理・化学・生物・工学・医科学にわたる広範な分野で、基礎から応用にいたる様々な研究を行ない、これまで多くの成果を上げてきた。

研究施設が公開され、講演会、イベントでは、高度な内容も含まれていたので、研究所の研究員が、一般市民の質疑に対して丁寧な応答を行っていた。

研究棟の入口付近

歴史を紐解く　その25

与野本町通りを歩く

―蔵造りの残るまち―

安斎　達雄

紀ごろから市が開かれており、はやくから交通の要衝であったようだ。といっても、与野郷の中心地として整備されたのは、江戸時代の初頭からで、それまでは南部の鈴谷地区が中心で、鴻沼の台地上に戦国時代の今宮館、真土館などが発掘、確認されている。これらの館は、いずれも小田原北条氏の支城と思われ、北条氏（いわゆる後北条氏）が豊臣秀吉軍に滅ぼされるとともに、館はすべて取り壊され、記載や伝承すら消されてしまった。

そして、江戸時代がはじまると、あらたな支配者のもとで、北にある現在の本町地区で新しいまちづくりが開始された。このとき、いくつかの館のあった南の鈴谷や上峰地区から、建材・資材などが運ばれ、利用された形跡もあるという。

新たな町づくり

現在の本町通りは、ほぼ直線状になっているが、新たなまちづくりの際に手を加えたものであろう。そして道の両側には、間口が狭く奥行きが長い短冊状の屋敷地がつくられた。これは江戸時代の市街地づくりの定石である。

あたらしい町や村には、シンボル・要となる寺院が必要である。そのため、西堀（旧浦和市）にあった円乗院が移されてきた。幕末の話になるが、与野領にあった三十八の寺院のうち、二十三は円乗院の末寺だったという。残念なことに文久二（一八六二）年の与野の大火で円乗院は消失し、本堂が再建されたのは大正十五（一九二六）年のことという。

本町通りとは、ふつう北は小村田氷川神社（本町東六丁目）、南は彩の国さいたま芸術劇場近くにある庚申堂（本町西一丁目）までの約一・五キロメートルをさす。町はこの間を北から上町・中町・下町に三分して、南北の両端の町境には各一基の庚申塔をたて、上町と中町の間、および中町と下町の間には地蔵菩薩立像各一基をたてて町の境としたという。円乗院の本堂左手前に建つ石造菩薩地蔵立像は、そのうち中町と下町の境にあったものという。

三つの町の中でもっとも距離が長く、にぎやかだったのは中町で、道の両側には商家が軒を連ねていた。

消えた市名

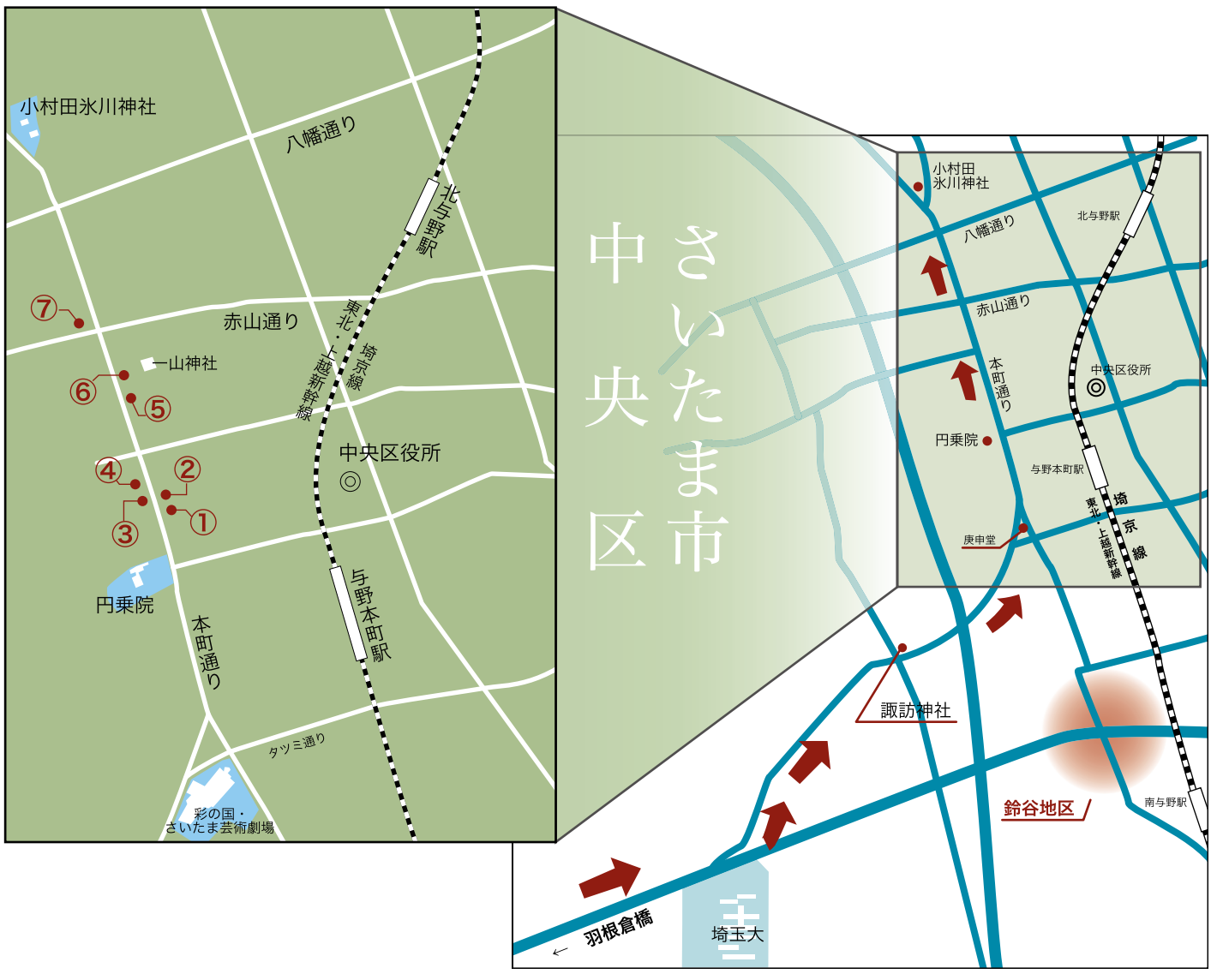
いま、住居表示を示す地図を見ても、「与野市」という市はない。平成十三（二〇〇一）年五月一日、浦和市・大宮市・与野市が合併して、あらたに「さいたま市」がつくられたからだ。さいたま市は、平成十五年四月一日には全国で十三番目の政令指定都市となり、市内には九の区、のちに（平成十七年四月一日）岩槻区がくわわって十の区がおかれた。そこには、浦和区、大宮区、岩槻区という名はみえるが、与野区という名はない。旧与野市域は中央区という名でまとめられているからだ。

これを、旧与野市民がどのように感じるかは別として、まちから与野という名が消えたわけではない。学校名のほか、ＪＲ京浜東北線の「与野」駅、ＪＲ埼京線の「北与野」「与野本町」「南与野」駅は残っているし、それぞれのバス停名もこっている。そして、当然のことではあるが、旧与野市の中央に通っている「与野本町通り」の名も健在である。

古い歴史をもつ地域

新しい市ができたときに多くの市で中心的な市街を「本町」と名づけたためか、本町通りという文字だけをみると、新しい町と思う人もいるかもしれない。しかし、与野の本町通りは、江戸時代以前からの古い歴史をもつ地域である。そして、この通りの呼び名は「ほんちょう」ではなく「ほんまち」である。

このあたりは十四世



① 中村行雄 家

② 旧井原もと 家

③ 井原庸次 家

④ 井原實 家

⑤ 石川久雄 家

⑥ 中村治平 家

⑦ 松本淑 家

中世からの鎌倉街道

与野本町通りが、それほどにぎわいをみせたのは、なぜなのだろうか。それは中世以来、鎌倉街道（鎌倉道）が通っていたことがあげられよう。

鎌倉街道の伝承をもつ道はあちこちにあるが、そのなかでも上道（かみつみち）・中道（なかつみち）・下道（しもつみち）の三つが主要道とされている。そのうち埼玉県内を通るのは上道と中道である。

上道は鎌倉から府中（東京都府中市）・久米川（所沢市）・笛吹峠（鳩山丘陵）・菅谷（嵐山町）を経て藤岡（群馬県藤岡市）方面に出る道で、遺構がもっとも残っている道である。また、中道は鎌倉から二俣川（横浜市）・世田谷・新宿・川口・大門（浦和市）・岩槻（さいたま市）・杉戸（埼玉県杉戸町）・栗橋（埼玉県栗橋町）を経て古河（茨城県古河市）方面に向う道である。

与野を通る鎌倉街道は、この上道と中道を結ぶ脇往還（脇道）であり、本道ではないにしろ重要な道であった。その経路を略記すると、所沢で本道の上道から分かれて柳瀬川沿い（左岸の場合、右岸の場合があった）に進み、新座市大和田を経て志木市宗岡に至る。また所沢から富士見市中通を経て志木市宗岡に至る道もある。これらの道は羽根倉で現在の荒川（中世では入間川だった）を渡り、浦和市大久保領家を経て与野本町に至る。羽根倉から与野本町に至る道は、与野では羽根倉道とよばれている。中世の羽根倉道は、今宮館などがある当時の中心地の鈴谷地区を経由していたのだろう。

与野を通る鎌倉街道はさらに北上し、加須市大越（おおごえ）で中道に合流する。ただし道はたった一つというわけではなく、他のコースのものもある。

奥州脇往還の継立場

江戸時代中期になると、こうした鎌倉街道と部分的にかさなるように、与野本町通りには「奥州街道」と呼ばれる道が賑わいをみせて来る。ここでいう奥州街道とは、江戸の日本橋を起点とする五街道の一つとしての幹線道路ではなく、脇往還（脇道）としての奥州街道である。そのコースは、甲州街道の日野宿（東京都日野市）から小川新田（小平市）・清戸（清瀬市）・引又（志木市）、ついで羽根倉で荒川を渡り、与野町・原市（はらいち）（上尾市）を経て日光御成街道の岩槻宿（さいたま市岩槻区）に出、そこから本道の奥州街道に至るものである。

こうした街道の繁栄を基礎に与野町は、正式には「宿（しゅく）」とはされていないが、元禄八（一八九五）年二月十八日付けで脇往還（わきおうかん）（脇街道）継立場（つぎたてば）として公認された。江戸時代には、宿場を通るごとにリレー式に人や馬を替えることになっており、そうした施設を継立場とよんだ。以後、大名や幕府役人の公用旅行者、商人などの人馬継立てなど、宿場と同様の働きをしている。

また、与野では中世以来、市が開かれていたが、享保五（一七二〇）年には四と九のつく日に定期市がたっていた。

羽根倉から与野本町へ

志木方面から荒川にかかる羽根倉橋を渡り、与野本町までの散策を試みてみよう。羽根倉橋の旧浦和市側には、かつて羽根倉河岸とよばれる河岸場があり、江戸浅草方面に向かって荒川の舟運が行われていた。与野町繁栄の要因の一つとして、羽根倉河岸の存在は大きい。

羽根倉橋からの道を直進すると右手に埼玉大学が見えてくる。正門の前にくると左に大きくカーブする道があるので、そのコースを通る。歩くのが得意でない人は、埼玉大学までバスで行き、そこから歩き始めるのが良い。

しばらく歩きつづけると、ゆるやかな上り坂（諏訪坂）となり、左手の高台に諏訪神社が見えてくる。このあたりから旧与野市域（現在さいたま市中央区）となる。諏訪坂は現在切通しとなっているが、昭和七（一九三二）年の工事までは、高低差の大きさに泣かされた坂という。

国道十七号線の陸橋をくぐると右手に「彩の国さいたま芸術劇場」が見えてくるが、われわれは前方で二又に分岐している道のうち、左前方の細めの道を行く。そのすぐ先に庚申堂があり、このあたりから与野本町通りがはじまる。さらに道を北に進むと、左手に鮮やかな赤と白の大きな多宝塔をもった寺院が現われる。これが与野の名刹円乗院だ。

蔵造りの建物を歩く

現在、蔵造りの建物（店蔵（みせぐら））＝店全体を蔵造りにしたもの）がよく残っているのは、円乗院から赤山通りが交わる間の、かつての中町地区であろう。円乗院から少し北にすすむと左手に埼玉県信用金庫があるが、その手前にある蔵造りの建物は井原庸次家で、文政年間（一八一八～一八三〇）の建築という。江戸時代には名主や問屋（といや）などをつとめるかたわら、味噌などの醸造を行っていて、「南の井原家」とよばれていた。信用金庫が建っている場所には袖蔵（そでぐら）（店蔵などに並立して建てた小さな蔵）があって、明治期には町役場として使われていた。

そのすぐ先の蔵造りの家は明治十七（一八八四）年に建てられた井原實家で、代々醤油の製造販売にあたり、屋号を川越屋というどん屋を営んでいる。明治三十（一八九七）年の建物で、かつては材木商であったという。

井原實家の少し先、バス停「本町中央」の前方（北方）斜め右手（向かい側）に、明治十（一八七七）年前後の建築の石川久雄家がある。向かって左手に新しい建物がたち、植木もあるため見過ごしやすいが、正面には漆喰（しっくい）白塗りの店蔵が見える。かつては質屋および穀物仲買問屋を営んでいた。

そのすぐ先（北）、一山（いっさん）神社参道の手前に明治十数年に建築の中村治平家がある。かつては米穀商を営んでいた。店蔵のむかって左には袖蔵も残る。

その先、本町通りが赤山街道と交わる北西角に、明治元年～三年（一八六八～一八七〇）にかけて建設された松本淑家がある。どっしりとした感じの店蔵で、本町通りの蔵造りの建物では、もっとも完備したものという。かつては肥料販売商を営み、屋号は「八百屋」である。

現在残されている蔵造りの店蔵は全部で十九軒というが、そのうち探しやすい与野本町通りの七軒をみてきた。バス停埼玉大学前から、歩くだけなら片道一時間の距離である。特にかわったところのある町ではないが、押し付けがましさがなく、素直な気持ちで歩きながら、歴史を感じとることができる。

目を右手（東側）斜め後ろに転じて、井原庸次家のほぼ向かい側にあるのが（旧）井原もと家で、黒い金属製の塀に囲まれているため、上部しか見えないが、江戸時代末期の建築といわれる。かつては病院だったという。

井原もと家の右隣（南隣）にあるのが中村行雄家で、現在、手打ちうどん屋を営んでいる。

円乗院

庚申堂

上峰諏訪神社

里神楽を観る、神楽囃子を聴く

第一回蒼天の会より

石山裕雅、武州里神楽保存会が主催する第二回「雅の会」、「蒼天の会」、5月28日（日）。

こしがや能楽堂で開催（入場無料）。

昨年、無形民俗文化財「武州里神楽」十世、石山裕雅の主催により、第一回が同能楽堂で開催され、観客に大きな感銘を与えた。今回のプログラムは

第一部（11時～13時30分）、神楽囃子、江戸囃子など笛を中心とする演奏。

裕雅氏は笛の名手として知られ、今回の公演では一門がこぞって出演される。

第二部（14時～16時30分）、里神楽 菩比神使（ほひのかみつかい）ほか。

ところ・「こしがや能楽堂」、JR武蔵野線南越谷駅北口から「朝日バス」所要時間20分、花田苑入口下車徒歩1分

問合せ・新座市教育委員会生涯学習課 TEL048（477）1111

無形民俗文化財「武州神楽」は、石山家によって、江戸中期から現代まで、四世紀、九代にわたって伝えられた。神社の祭りに神楽を奉納する慣わしは永く、石山家の神楽は近郷で欠かせないものであった。十世の裕雅氏が発会した「蒼天」の会の求めるものは、どんなに厚い雲の上にも蒼い空が広がっていることを信じ、前進することだ。

LIVE FOR LIFE 2006 in ASAKA 本田美奈子. 追悼

朝霞市出身の歌手本田美奈子.は、アイドルからクラシックへと成長し、ステージから熱唱を送り続けてきた。しかし、デビュー20年、急性白血病を患い、若くして世を去った。

デビュー後も自宅から通い、生前、私の一番大切な場所と語っていた朝霞で、4月22・23日、追悼の催しが開かれた。朝霞市、同商工会などの共催、企画協力は、LIVE FOR LIFE事務局ほか、協賛・コロンビアミュージックエンタテインメント株式会社。

会場では、在りし日のフィルムを上映、写真とゆかりの品が展示された。22日は朝霞市民の招待日だったが、一般公開された翌日も、会場の「ゆめぱれす」（朝霞市市民会館）は熱気に包まれた。

―LIVE FOR LIFE―とは、人はみんな生きるために生まれてくる。しかし、さまざまな困難に直面したとき、人は悲しみにうちのめされ、絶望してしまうが、諦めてはならない。ゆっくりでもいいから、もう一度勇気をだして、前を向いて歩き出そう。この言葉は一人の歌手本田美奈子.さんの生前の願いから生まれた。LIVE FOR LIFE事務局は、白血病患者の方々とその支援者を組織化し、支援するネットワークを構築して、精力的な活動を行っている（LIVE FOR LIFE ホームページ http://live-for-life.org/）。

「イロハガッパ」の除幕式／志木市本町二丁目本町通り「川口信用金庫」前で

志木市「いろは商店会」が創立三十周年に、石像「イロハガッパ」を設置

作者の内田栄信さんは、かつて、本町通りを流れていた「野火止用水」のせせらぎを聞いているカッパをイメージして制作したと語っている。

会場で展示された美奈子.さんがミュージカルで着用した衣装の数々

地域情報

特定非営利活動法人 NPO「市民フォーラム」

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

＊　＊　＊

◇　読者の「オピニオン（意見／考え）」を募集します。

TEL 090（3048）5502

編集部　原宛にどうぞ

CREATIVE BOOK「首都圏人」第二号発売御案内

暮らしを楽しむ知的なヒントを与える「首都圏人」は季刊で発行します。

一般書店で販売中です。「楽天ブックス」でも。

ISBN4-8354-7204-7

ISBN4-8354-7205-5

編集・NPO市民フォーラム
発売・ブッキング

B5版100ページ、
定価・本体600円＋税